

---

# 騎士物語

レイス

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

騎士物語

### 【Zコード】

Z3773P

### 【作者名】

レイス

### 【あらすじ】

どこか遠い異世界のお話し。 その世界では魔物と呼ばれる謎の生物が人を襲い、各國はそれらを討伐することに、躍起になつていた。しかし、数百以上の国々からなるこの世界は、魔物に関するそれらを除けば大きな争いもなく、平和だった。 主人公のフィリアは大国、アメリカ王国の姫、シンシア姫直属の近衛騎士として暮らしている。 ある日、魔物の討伐任務に駆り出されたフィリアだったが

処女作、更新不定期、1話が短い、誤字脱字あるかも・・・それでもいいのならよろしくお願ひします。

## プロローグ

私が3歳くらいのころ。

物心の付いたときくらいに一つ、鮮明に覚えている思い出がある。

国を治めている王様のお妃様の誕生日パレード。

私たちの家族は奇跡的に最前列という特等席で華やかなパレードの様子を眺めていた。

それだけでも、記憶に残る出来事。

でも、更に印象に残る出来事があった。

まだ幼い姫様が私の方を向いて笑みをかけてくれた。

今思えば、それは偶然や単なる思い過ごしだったかも知れない。でもそれが私にとって大きな出来事だったことに違はない。そして私は幼いながらに想いを両親に伝えた。

「騎士になりたい、騎士になつて姫様を守りたい」

・・・と。

両親はこころよく了承してくれた。

その日以降、私は騎士になるための鍛錬を続ける日々が始まった。幼かつた頃や、病にかかるて武器を持てないときは、母から礼儀作法や言葉遣い、簡単な医学、文学なども学んだ。

大きくなつてからは、父からとにかく武器の扱いを覚えた。

剣術に槍術に弓術はもちろん。

戦斧やメイスといった重い武器や、弩やクロスボウなど特殊な物まで、いろいろと叩き込まれた。

長い長い間続いた訓練と、両親のおかげで私は、今、姫様の近衛騎士として、姫様のお側にいることができる。

## プロローグ（後書き）

お読みいただきありがとうございました。  
しばらくの間はグダグダラララとなつていてますので注意して下さい。

## 異変 1（前書き）

いきなり場面転換しています、注意。

この話・・・自分で書いていて何のかわからなくなつて参りました。  
すこく不安です。

このグダグダが「デフォルト」と思ってお読み下さい。

アメリカ王国の城内の一室では、魔物に関する作戦会議が行われていた。

少数の魔物が現れ、人を襲つたから退治する。

会議の内容を要約するこのような形になる。

そして、その討伐作戦に私も連れていかれるのだ。

近衛騎士とはいえ、非常時以外は一般の兵士と何ら変わりはない扱いを受ける、逆に言つと一般兵の仕事は近衛騎士の仕事でもあると言つこと。

私としては姫様のお側を片時も離れたくはないのだけれど。

・・・文句を言つても何にもならないから考え方を変える。

姫様に私の活躍を聞かせるために魔物討伐任務を受けると。

そう、武勇伝みたいな話を作ろつ。

剣の腕は今まで磨いてきた、きっと大丈夫。

「フィリアさん・・・？」

「・・・姫様！」

後ろを向くと、私の主でもある姫様があられた。

「あつ・・・驚かれてしまわれましたか？」

「いえ、そんなことありませんよ、何かご用ですか？」

「初めて魔物の討伐任務に行くのでしたよね、つい先ほど初めて耳にして、それで・・・」

「はい、もうすぐ出発ですよ」

姫様は少し辺りを見てから言った。

「戦功などいりません、ただ生きて帰つて下さい、私はそれだけ言

いたくて・・・

「はい、誠意努力します」

私はそう伝えた。

魔物の強さはまちまちだ、弱いのがいれば強いのもいる。

魔物との戦いで命を落とした者も少なくはない。

自分の剣の腕を過信したまま、戦つたことのない敵と戦うことは危

険な行いだ。

姫様のおっしゃる通り、生きて帰ることを考えようと思つた。

「姫様・・・そろそろ行かなければならぬので」

「わかりました、お気をつけて」

なんとなく不安そうな顔を姫様はしていた。

## 異変 1（後書き）

### キャラ紹介

フィリア 16歳 女  
シンシア姫の近衛騎士。

### 性格

- ・基本的に真面目
- ・姫様一筋
- ・やや優柔不断

### 服装

- ・基本的に鎧
- ・私服は地味

### 武器

- ・トウハンドソード

全長250cm 重量6.5kg

- ・ミニセリコルデ

全長30cm 重量0.1kg

幼少の頃に一目惚れしてからは姫様一筋

姫様の意見は自分の意見とし、ころころ考え方を変える

剣の腕はけして悪くはない

6キロの大剣を振り回せるほど力が強い。

## 異変 2（前書き）

やっとそれっぽくなつてしましました。

遅筆であります。

読みにくい文章であります。

不安そうな姫様の顔が私の頭からはなれなかつた。  
どうしてあのような顔をしていたのか。

そればかりが私の頭をかき乱していた。

・・・ただ考えていても仕方が無いのかもしねない。

姫様に言われた通り、城まで生きて帰ること。  
それだけを考えることにした。

これだけなら私のすべきことがはつきりしているし、姫様の一番望  
んでいたこともある。

そして、そのための訓練を私は毎日してきていた。

そう思つことで気持ちが少し楽になつた。

気持ちを落ち着かせるため、空を見た。

澄んだ空が見えたのだが・・・視界の隅の方にどす黒い醜悪な物。  
魔物が見えた。

魔物の出現ポイントでまだ先だつたはずなのに。  
考へても仕方が無い、敵が現れたのだから倒さないと。  
戦うための訓練は沢山うけてきたはずだ。

## 異変 2（後書き）

キャラ紹介

シンシア 15歳 女

性格

- ・おつとり
- ・心配性
- ・ドS

服装

- ・お姫様らしいフリフリドレス
- ・実は動きやすい服装のほうが好きで、部屋着は軽装

武器

- ・姫様だから使いません、嗜んではいる

おつとりしているが頭の回転は速い  
フイリアに全幅の信頼を置いている  
実はフイリアが自身を惚れていることを知っていたりする（惚れた  
理由も知っている）

## 先走 1（前書き）

クリスマスの投稿です。

話のほうはすでに詰まつていて、しばらく次話は遅れそう・・・。読  
んでくださっている方、すみません。

重い大剣を振りかざし、一番敵の密集している所まで突撃を仕掛け  
る。

「はあ！」

声と共に一撃を振り下ろす。

犬の形をしたもののが、剣の重さに耐え切れず引きちぎれ、少しして  
残骸は霧のように四散していった。

姫様が危険だと仰っていた魔物をあっさりと倒したことに私は疑問  
を感じた。

なぜ姫様はあんなにも、魔物との戦いを心配していたのだろう？  
魔物だつて襲つてこない、仲間を一匹倒したから畏縮しているのだ  
らうか？

・・・この際どうでもいい。

早く城に帰りたかった。

ならば、することは一つ。

敵を殲滅する。

ただそれだけ。

四散した魔物を追う。

やがて、四散した魔物の一部に追いついた。

再び、剣を振り上げる。

さつきのような声は上げない、ただ、重いものを地面に落とすよう  
に大剣を下ろした。

ガキッ、と乾いた音がする。

この音はしとめた時の音ではない。

「おつ・・・」・・・

瞬間、腹部に重い衝撃を感じた。

きれいに手入れをしていた鎧も、打撃は吸収してくれない。

何がどうしたのか、私にはまったくわからなかつた。

ただ痛みだけが頭の中を支配していた。

目はチカチカしている、白と黒、光と闇がごちゃまぜに交差して物を判別することなどできない。

数十秒して、視界は、ほんの少しだけ戻つた、そしてうつすらと見える影が私を怯えさせた。

影は犬のような形をしていて、きっと魔物だ。

その影が、すごいスピードで近づいてきて……

「うつ・・・ぐああ・・・」

腹部を押されたまま棒立ちになつっていた私は、犬の魔物の体当たりを受け盛大に吹っ飛ばされた。

吹っ飛ばされて、後頭部を打ち付けた。

私の真後ろには樅の木でもあつたのだろうか？・すごく痛い。

おなかが痛い、魔物に吹っ飛ばされたりしたせいだ。

あたまはもつと痛い、運の悪いことに何か硬いものに打ち付けたから。

ら。

目がチカチカする、たぶんたくさん痛くなつたから。

すごくこわい、体がぼろぼろになつて、ひとりだからだとおもう。

何で姫様が心配していたのか、それがよくわかつた。

魔物は少数でも強いし、頭もいいみたいだつた。

今になつて後悔するのは馬鹿にもほどがあるが。

敵を追うために深追いしていたから、味方は私を見つけてくれないかもしれない。

最初から油断していた私の失策。

・・・あまりにもあつけないなあ、とこの状況で思った。

味方は来ないし、体は動かない、目も満足に見えない、剣とかどこかに行つた。

絶望的な状況、誰もが想像できる最悪の結末が、目の前にある。

絶望的ではあるけれど、まだ死にたくは無い。唐突にそう思つた。  
姫様のお傍にいたい。

私の十余年は姫様のためにささげてきたつもりだった。

それがいま無に帰そうとしている。

死ぬことに対する諦めでいたけれど、不意にそんなことを思い、死になくなつた。

ゆつくりと立つてみる。

案外なんとも無かつた、少しふらついた程度。

案外人は丈夫にできている物だな、どーでもいいことを考えた・・・  
一瞬だけ。

少しずつ光を取り戻していつていてる田を頼りに、剣を探す。  
あつた、すぐそこに。

一歩歩く。

「グルルルルル・・・」

犬ような鳴き声を出している、犬型の魔物。

あの体当たりを受けたら、再び立ち上がる気力など無い。  
本隊に戻るための最短ルートを頭の中で構築する。

ここからまっすぐ走つていけば本隊と合流できるだろう。

・・・あの魔物の向こうがわに行けたらの話である。

魔物を倒すために一人勝手に突撃していたので、この結果は当たり前といえば当たり前。

生きて帰れたら、私はたぶん泣くと思つ。

息を整える。

すり足しながら半円を描くようにゆっくりと向こう側へ。

あんな目にあったので、まともに戦おうなんて考えてなんていない。ゆっくり、ゆっくり。

半分ほどまで来れた、あと少し。

警戒はしているようだけれど、近づいてはこない。

このまま、逃げれる。油断はできないが希望がわいてきた。

「バウツ！」

すぐ後ろから、犬のような魔物の鳴き声。

魔物は複数いたのを忘れていた。

振り返る暇もなく押し倒された。

魔物が私の上にいる、のしかかっている。

犬型の魔物の足の爪が、私の腕や首の皮膚を引っかいている。

痛みはあまり無いが、皮膚に食い込む爪の無機質な感触と冷たさを感じる。

力を振り絞るがのしかかれた状態からの脱出は、無理。

死にたくないから足搔く、けれど死の結末は日に見えてしまった。

気がつくと、城にいた。

夢でも見ていたのかとベタなオチを一瞬考えていたのだが。体にある無数の傷と、その傷から発せられる痛みが夢ではないと、教えている。

しばらく後、敬愛する姫様が私の元にいらした。

話を聞くと、あの後姫様が私の事を不安に思い援軍を出すように、姫様の父（国王）に掛け合つて、増援を出した。

その増援が本隊と合流、体勢を立て直し魔物の群れを退け、そのまま私を助けてくれた。

と、姫様や後輩の騎士から聞いた。

情けない・・・

その後、体の検査を受けた。

重い剣を無理な体勢で振り回したため、右人差し指にヒビと、右親指と小指が脱臼、あとすり傷刺し傷が無数。

魔物の討伐隊の中で一番の大怪我らしい。

・・・情けない・・・

死ぬことは回避できだが、あらゆる方面から、きつこお言葉を受けたのは言うまでもない。

## 先走 2（後書き）

あけましておめでと「ひ」れこます。

今日はだらだらと文字数を稼ぐ書き方となりました。  
時間をかけた割には低いクオリティで本当にすみません（・・）  
m。

さすがにやややややすぎますかねー・・・

次回は療養中のフィリアを中心に説明過多なお話になる予定です。

## 脱力（前書き）

「みんな、インフルエンザには気をつけようね！」

前回の投稿からものすごい穴が開いてしまった理由です。プロットを大幅に書き換えたものもありますが。

と言う訳で、死に物狂いで投稿したからぜひ読んでね。

今回は前回の後書きに書いたとおり、療養中のフリィアのお話、新キャラも出るよ！

## 脱力

「あと一週間、最低でも一週間は様子を見よつ、完治直前の今が一番危ないからね」

私を見てくれた医者が言つ。

「はい、わかりました」

右手のヒビ以外は完全に完治、ヒビも一週間待てば治ると仰つている。

しばらく話をして、医者の先生が部屋を出て行く。

私としては、早く訓練をしたいという気持ちもある。

かれこれ半月、ほとんどを自室のベッドですごしてゐるからだらう、と、自分を勝手に分析してみたり。

別に外出が許されていないというわけではない。

ただ、外に出ると訓練をしたいといった気持ちがあふれ出そうなので外出していない。

幸い、毎日のように姫様がお見舞いをしてくれるので、暇にはなつていはない。

とか考えていると。

「フイリアさん」

扉の外から姫様の声がする。正直などこか、姫様の訪問が最大の楽しみとなつていて。

「はい、開いてます！」

力チャリ、と扉が開いて・・・

「こんにちわ、具合はどうですか？」

姫様が部屋に入つてくる。

「大丈夫です、医者先生も一週間で完治すると言つておられました

し

「早く治してくださいよね、私先輩の強さとか見てみたいんですね」

「あ～、姫様、後ろにいる方は誰でしょう？」

今更ながら気がついた、姫様以外に誰かいる。

姫様も後ろを向く、気がついてなかつたらしい。

「はじめまして、フィリア先輩」

「思い出しました、新しく近衛騎士として私の警護をしてくれるエルトリー・ゼさんです」

「長つたらしいのでエルと気軽に言つてくださいね、姫様、先輩」

「新しく・・・？」

私は不安で仕方なかつた。

「頼もしいお人みたいです、剣の腕も確かだと騎士団長が仰っていました」

「わ、私は・・・クビ・・・？」

おそるおそる聞くと、エルトリー・ゼさんは大笑いした。

「そんなんじやないですよ、私はただの追加された人員です、たぶんフリイア先輩の部下扱いになると思いますよ」  
ふあ――――――――――――――――――。

大きく息を吐いた。

それと一緒に溜まっていた不安を全て吐き出した。

姫様の護衛と言う命の次に大切な職業を奪われたのではないか、と、短時間の間で一気にブルーになつたりしてた。

「でもなんで・・・今更増員ですか？五年以上姫様と共にいたのに？」

「」の間の魔物退治の時みたいにならないようにするためだと騎士団長は言つてました、よく分からないですけどペアを組んでもらつためなのでは？」

姫様はそう言つた。

ただ、当事者である私は冷や汗が流れていたりしている。  
やはりあの時の独断専行は知られていたらしい・・・

チラツと、ヒルトリー・ゼさんを盗み見る。

視線に気がついたのか、私を見つめながら口を開いた。

「がんばってフイリア先輩が突撃しないよ！」お手伝いしますから任せください、姫様」

この人、知ってるよ……私の失態……

姫様の頭の上にはハテナがある、何かに感ずいたようではない。それはいい。

ただ。

その話が姫様の耳に届くようなことがあれば。

せっかくの姫様の忠告を受けたのにそれを無視して怪我。

・・・最悪、卒倒しかねない・・・

少なくとも信頼はなくなる。

そうなれば、どうなる？

侮蔑の言葉や蔑むような視線。

まずは精神的に攻撃をしてくるだらう。

何時間、何日とかけて。

心が弱り始めたら、次は身体からだを虐める。言葉の責めも交えて。

・・・嫌いではないかも

「フイリアさん？」

「本当にごめんなさい！――！」

姫様に声をかけられて咄嗟に出てきた言葉が謝罪の言葉だった。

「お、怒つていませんよ！？」

姫様が狼狽している。

「あつ、何でも無いです、ちょっとボケつとしてて、思つたより怪

我の影響がどうこうしているのかな？・・・アハハハハ・・・

とりあえずその場を取り繕つておく。

「少し長く居てしまつたようですね、エルトリー<sup>ゼ</sup>さん、今日はもう出ましょう」

「わかりました、姫様、お大事に、先輩」

「お大事にフイリアさん、明日も来ますね」

二人が部屋から出て行きしばらくたつた。

何とか、ばれずエルトリー<sup>ゼ</sup>にすんだかもしない。

が、あの子の事を思うと不安にしかならない。

ふと、両手を見る。

「怪我、遅く治らないかな・・・」

つい不謹慎な事をこぼしてしまった。

父が聞いていたら殴り飛ばされていたかもしない。

もう、外も暗い。

寝てしまおう。

これからのことばこれからでいい。

そう軽く考え、眠るため、目を閉じた。

それにも・・・私つて姫様のあんなことを妄想してしまつたとか・・・自分が考えている以上にやられるのが好きなのだろうか。こんなことは15年生きていて、初めてだった、もちろんあんなことを妄想したのも初めてだし、それについて考えたのも初めてだった。

こんな無駄なことで悩んでいる場合ではないのに。

## 脱力（後書き）

今回のお話を要約すると・・・

近衛騎士団のエルトリーゼが仲間になった。

近衛騎士フリイアはスキル「受け」を手に入れた。

近衛騎士フリイアは称号「妄想癖」を手に入れた。こんな感じ。

百合百合しく無いと言われたので急遽フリイアに痛い設定を追加。まあ・・・Gレタグあるしこの程度は大丈夫と開き直ってみる。エルトリーゼの設定は次回に公表予定、一つ言つておくとエルはいい子でアホの子、だからフリイアを脅したりしませんよ、ほんとだよ。

今回で魔物討伐の章は終了します、次回は飛ばしていくかと（戦闘的な意味で）。

せっかく残酷描写のタグがあるのに残酷な所が少ないと言われたので、次章は流血注意。

## 新たな任務（前書き）

長く待たせてしまった割には、内容の薄い、グダグダしてしまった回です。

次話は可能な限り早く出す予定なので、それまでの繋ぎとしてみてもらえれば幸いです。

「先輩、復帰後初めての仕事は私と一緒にじゃないと聞きました・・・」

「そ、そつなのですか・・・ハルトワーザさん」

私の隣で落胆している エルトリーセを横目に私は心臓かハケハケと脈を打つてゐるようだ。

「だけれど・・・」

「私の失態の事、姫様には絶対に黙つてください！」

「それは大丈夫ですよー、  
童れ

の先輩にそこまで言われたら、いえ、言わなくとも言こませんよ

ニコニコとエルは笑っている。

「本川は、二十九にたどり、」

いや、この程度のこととて頭を下げるにないでくださいよ」「頭は下げたままなので、エルの表情は見えないが、声が高い

「それはいいのですけど、何でそんなに仕事の失敗を隠そうとする

んてす?

「耳に入らうものなら氣を失います、今まで話が姫様の耳に入つてこなかつたのは皆さんがそう考えて口を閉じてゐるからでしょうね」「そのようなものなんですかね、いいたいことはわかりますけどね、あの姫様はそんなに精神は弱くないかと……」

「いやあ、怪我と失態では違うものと思いますけどね、あの姫様猫の稽古の途中に血を見ただけで大慌てしてるほどです」

かろ・・・

エルの表情が変わった、瞳は一点を見つめたまま動かない。

「どうしました？」

エルの見ている方向を見てみたが何も無い、ただただ見慣れた光景しかなかつた。

「いえ、何もありませんよ、そうですね、しられるのはヤバイと私も思います」

声色を変え、エルは私の意見に肯定した。

どうかしたの？ そう問い合わせたけれども、エルは違いますと言つているだけだつた。

「フィリアさん、次の任務、決ましたのですか？」

「はい、最近城からそう遠くない地域で活動している盗賊团については知っていますよね」

「ええ、街道に現れては旅人や商人の交易品や荷物を殺人をしてでも奪い取る残虐非道な集団・・・兵士やメイドからよく聞きました」「私一人で動向を探り、可能ならば盗賊団を捕縛・・・長期間城から離れることになりますけどエルトリーゼさんがいますから私がいなくても大丈夫でしょう」

「私の事は大丈夫です、でも、一人でそのような危険な任務を・・・」

「危なくなれば城に戻ります・・・戦うことが任務ではありませんから、引き際を誤るつもりはありません」

「本当に気をつけてくださいね、あなたには前科ありますから」

「そう言って、姫様は少し微笑んだ。

「もちろんです、からかわないでください」

「出発は何時なのです？」

「明後日です、それまでは調練に出なくともよいとのことなので城内で羽を伸ばすつもりです」

「ゆっくり休んでくださいね、また任務に失敗すれば今度こそクビ

かもしだせんから」

姫様の悪気の無い言葉が胸に刺さつた。

## 新たな任務（後書き）

### キャラ紹介

エルトリーゼ 17歳 女  
シンシア姫の近衛騎士。

### 性格

- ・軽く浮いている
- ・仲間思い

### 服装

- ・ラフな格好が多い
- ・暖色系の色の服を着る事が多い
- ・城にいるときはもちろん騎士の制服や鎧を着る

### 武器

- ・セイバー（直刀）

全長70cm 重量1.4kg

自分よりも年下なのに騎士（それもシンシア姫を警護する事を主とする近衛騎士）となつたフイリアに憧れを抱いている  
言動は軽いが行動は慎重

近衛騎士となる前は普通の兵士として仕事に従事していた

## 見慣れたはずの町（前書き）

あいかわらずグダつています。

ここからはじめるか結構悩んだのですが・・・私には城から出て行く前の描写はかけないのでここからのスタートにしました・・・

## 見慣れたはずの町

田の高いうちに着いたこの場所は、町と呼ぶにはあまりにも人の気配がなかつた。

子供の頃は剣の訓練の合間に、母に連れてこられた町だつた。国王様が直接統治している城とその城下町と、他の国の関所との中継地點出会つたこの町は宿場として機能していたと同時に商人が別の町にて売れ残つた交易品を安く売つてくれる商人の町としても機能していた。

要約すると、とにかく賑やかだつた。

それが今は、人の気配がない町になつてしまつてゐる。

どうしてこうなつたか、強盗集団が現れたからだらう。

最後に来たのは数年前とはいえここまで町が変わることは思えない。

懐かしい町並みと、記憶と食い違う光景に違和感を感じながら、私は騎士団長に指示された住所にやつてきた。

「ここにこんな建物なんて……」

思わず、考えたことが声になつて出でてきた。

地味で無骨でそれでいて巨大な建物があつた。

この町は確かに来た回数は少ないがどのような建物があるかを記憶していたはずだつた。

「……変わるものの……？」

不思議な気持ちに包まれながら、田の前の建物のドアを、ノンノンとノックする。

「ここは王国の兵士詰め所です、用件は？」

扉を開けることもせず、返事をされた。

「王国近衛騎士フイリアと申します、例の件についての話をするために王国騎士団より派遣されました、扉を開けてもらえないか?」  
意識していたつもりはなかつたけど、気がついたら口調が強くなつているように感じた。

・・・

しかし、待てども扉は開かない。

扉の向こう、遠いところで声がするように感じたが、来訪者である私の話をしているようには聞こえない。

騎士団長は本当に話を通してくれていたのだろうか?

こんな風にキレイに無視されると、対応云々よりもそつちのほうが気になつてきた。

ゆうに十分は待つた気がする。

さすがに、そんな気質ではなんだけれども・・・

「王国近衛騎士のフイリアと言つ者です、騎士団長からの正式な依頼でここにきました、依頼を証明する書状もあります、とにかく開けてくれませんか?」

声を大にして言つ。

遠まわしに嫌味を言つた(つもりな)ので、すぐにでも開けてくれると思つ。

嫌味なんて言つたのは始めてかも、などと考えていたが・・・扉は開かない。

背中に吊り下げる大剣の柄を握ろうとして・・・その手を止めた、話を聞いてくれないとしても強行突破とか、そんな浅はかな行動をしちゃ駄目。

騎士としてそんなことをしては駄目、当たり前のことを考えた。

そんなこんなで、うだうだと、一時間は潰した・・・と思つ。

こんなにも不快な気持ちになつたのは初めてかもしれない。

「開けてください?はいりますよ!」

最後の警告のつもりで言いつた。

戸を押す。

ガチャ。

戸を引く。

ガチャリ。

いつのまに鍵をかけたのだろうか。

押せど引けど扉は金属音を立てて開かない。

・・・一度城に戻つて騎士団長に相談しようか？

「誰だ、お前」

「まさか殺人強盗集団の一昧ではないでしょ？」

真後ろから声がした。

怪訝な表情をしている女性と男性が・・・

「私は騎士団からその殺人強盗集団の調査をするために派遣された  
フィリアです、このことを証明する書状もあります、この中に入ら  
せてください」

頑張つて穏やかな顔を作つた。

不満を顔に出してはいけないとthoughtた、今来たこの人たちは何の関  
係もないから。

「とりあえず、背中の剣を下ろしな、こつちは丸腰なんだから、お  
前がやつらの仲間じゃないなんて保障はないんだから」「

言われた通りにする、彼女たちの言つことは正論だから。  
男性のほうが私の剣を手に取る。

「隠し持つている武器もない様子だし・・・それじゃあ来なさい」

## 見慣れたはずの町（後書き）

ここが終わらせてもいいものかと案外悩んだのですが・・・このまま続けてもやはりグダグダするのは目に見えているのでここでいつたんきるうかと思います。

最後になりますが

3／11の地震の被災者の方、本当に頑張ってください。  
今はまだこんな駄文をつらつらと連ねるだけの私ですが、私の書いたお話を読み、面白いと思ってくれる人がいてくれるよう頑張ります。

## 中庭で（前書き）

今回は城に残つてゐる姫様とエルの小話。  
断章のような感じで、軽い気持ちで書いていたのですが・・・  
まあ、内容についてはこれくらいにしてと、私の書く駄作に付き合  
つてくださる方、いつも読んでくださっている方に感謝の気持ちを  
込めて。

私はじつと的を見据えた。

左目を閉じ、右目で標的を狙う。

周りのものなんて何にも見えない。

眼中に入らない。

地をしつかり踏み、風を感じる。

風の向きや重力のことなんて馬鹿な私にはわかりっこないが、はつきりと的と自分の間を結ぶ曲線が見えている気がする。

「エルトリーゼさん？」

私の思い描いていた軌跡を微妙に外した。

少しばかり下に行つてしまつた。

バキヤ、と鈍い音を立てて碎けたりんごの破片が落ちる。

「ひ、姫様、どうなされました？」

微妙に声が引きつてしまつたが気にしない。

「あらあら、何をしておられたのかしらね？・・・ふふふ・・・」

「パチンコでりんごのみを落としてただけですよ、集中力を高めるのにいいんです、ただそれだけですよ？アハハ・・・」

笑つてを見せたが声が自分でも分かるくらい小さかつた、萎縮しているわけではないと思つていたのだけれど。

「昨日の事なのですけれど、フイリア有何を話していたのかな、と、少し気になりました、私と目を合わせた瞬間に視線を逸らしたり、私が視界に入つたとたん慌ててその場から逃げるよう立ち去つたり、気になる、怪しい行動を目の当たりにしましたからね、その辺りきつちり話してもらいましょうか、と思いまして」

私つて馬鹿だなー、何で姫様が話している間に逃げなかつたのだろうか？

答えは簡単、足がすくんでいただけです、ただそれだけです。

まあ、逃げたところで一兵卒の命運なんてたかが知れてはいるが。

「せんぱいはね、しらないのですよ、ひめさまのほんじょうを、そつちのほつめんではわたしはひがいしゃもといけいけんしゃですから、けいじくはすぐなくともしておいたほうがいいかとかんがえましてね」

片言になつてゐるよ、すじく棒読みです。

でも呂律がうまく回りません、誰か、可哀想な私を助けてください。貴女で飽きて以来もう遊ぶ気は起きないのだけれど?といつより、出来ないと言えばいいわね、痛いだの、助けてだのうるさいから・・・

そのおかげで私は万々歳でした。

「それに、何も知らないとか嫌じやないですか、姫様は、先輩の好意を知った上で、わからないととぼけているのですよね、何だか・・・

「私の趣味に踊らされて可哀想とでも?・・・

「そうです」

私はこじぞとばかりにきつぱりと言つた。

いつもは私の話なんてなあなあで済ませてしまつ姫様だけど、今だけは聞いてくれていい、ならば、私からはつきりというべき、先輩は城の誰もが見ても、姫様に對して特別な感情を抱いていると。

姫の命を自らの命とし、正に剣に盾にと頑くしてきた。

姫様の大事には必ずそこに先輩がいて、姫様の笑顔のとなりには先輩の笑顔があつて・・・

「私がね、フイリアの好意以上の気持ちを受け取れると思つているの?」

「そんな

「一つの國のお姫様が、ただの兵士と、まで言えばお分かりになるかと?」

ああ~、何となく分かつたきもする、納得はしたわけではないけれど

ど。

「貴女みたいに、虜める側と虜められる側で単純にわかりやすく分かれるわけではないからね、ここから先は、いじめっ子の娯楽じゃすまないと思うのだけれど」

エルトリーぜは何も言わずに立ち去った、今までならそんなことはなかつたけれど。

意外と私も乙女なのかな、なんて考えてみた。

案外似合っているかもしけない、なんだかんだでフイリアは好きだ、エルも応援してくれているようすだ、使いや顔見知りの兵や騎士、騎士団長までもが期待している節がある。

「でも、やっぱり無理かな、父さんや母さんや偉い人がなんていうか

## 中庭で（後書き）

今回もお読みくださってありがとうございます。

前書きにも書きましたが、今回はエルがこの前のJとを聞い詰められてあたふたしているだけの予定だったのですが・・・シンシア姫は意外と素直な子だったようです。S設定で進めようと考えていたのだけれどなあ・・・

## 不安とマイナーハイク（前書き）

本当にすみません。  
最初に謝つておきました。

と言つのも今回は長い間お待たせをせてしまつたのにあんまりかけ  
てないからです、すぐ今回は短いです。

次回以降はこんなことにあまりならぬように、気をつけたいと思  
す、今回は場つなぎ程度にお読みください。

## 不安とイライラ

「あたしはそんなよ'うには思ってないからな」「僕も同じです、あなたは悪くないです」

私を中心に入る手引きをしてくれた二人は積極的に話しかけてくれているが、他はほとんど無視をしている。

「私は・・・大丈夫です・・・」

そう言'うと、私の体は萎縮してしまった。

なんだか居心地が悪くて、気持ち悪い。

「二人はあんなふうに私を無視しないんですか」

よく考えればこの質問はこの場の空気を悪くするものだと分かったのに。

何か言'出せなければと無駄に焦っていた私は、そう質問してしまつた。

奥の数人がこっちを見ていることに気がついた。

「中途半端に閑つたからね、このまま放置するといつちの寝覚めに  
関るから」

女性はその視線に構わず言'う。

「私は姉さんについていくだけですし、その・・・」

青年はうつむきながら言'う。

「まあ、今日とは言わないけど近いうちにまた事件は起'る、それ  
を待つて、情報収集に勤めるとい'うや、手伝つてやるからね  
「あの、ありがとうございます」

## 不安とイライラと（後書き）

次回予告。

超強い敵と戦います・・・の予定です。

## 恋のこせ（前書き）

初めての方、はじめまして。

前話をお読みになつてくれた方、ご愛読ありがとうございます。

更新を実質一ヶ月以上放置してしまったので、今回は特に頑張つて  
みたつもりです。

それでは続きをどうぞ。

## 懲りしさ

「とりあえず事件のおこった現場巡りでもするか」

「はい、どこに行くかは任せます」

とりあえず町の外、特に商人が行き来するらしい街道に行くこととなつた。

「そういうやあんた、名前聞いてたか？」

「おそらく言つてないかと・・・私は近衛騎士団所属のフィリアと申します」

「死ぬかもしれない任務につかされちまつたわけですね・・・」

「青年が不意にボソリとつぶやいた。」

「そんなに酷いんですか？」

「ある程度の実力のあるであろう商人の手付きの剣士すら死体になつてた、あたしらの仲間も17人死んだよ」

「いたたまれない気持ちになる。」

「そうですか・・・」

「まあ、僕たちは死ぬのが仕事みたいなどころがありますし、僕もみんなは覚悟は出来てると思います」

「街道にはすぐについた。」

「あのような事件があつたと聞いたけれど、人通りは多いように思える。」

「ここ以外で城にいく道は無いに等しいからねえ、びくびくしながら歩いてるんだよ」

女性は私の疑問を感じ取ったのか言つてくれた。

さつさとここを通り抜けようとしているようで、全員がせかせかしていてあたりは重く不可解な空気が漂つていて。

「最近はこんな昼間から堂々と殺人しているようで、今も安全ではないんですよ、僕は早く立ち去りたいかなあ、なんて」

「馬鹿が、あたしらがびびつてどうする、たとえ死んでも人を守る

んだろ？」

「助けてくれええ！！」

悲鳴が聞こえた、辺りを劈くような声が。

「うわさをすれば…ですか…」

「死にたくなかったら、兵舎に帰れ」

「・・・戦います姐さん」

「とりあえずは時間稼ぎだ、避難と援軍が来るまでの時間稼ぎ、フイリア武器はある？」

「背中のものが見えませんか」

「行きますよ！」

青年の声と共に走り出した。

すでに血溜まりがあつた。

その中に一人の男が居る。

服に靴、帽子。

普通に近くに住んでいる人のように見えた。武器も何も持っていないようなのに？

「あんたがこの辺りで有名な人殺しか？」

・・・ううああ・・・おおおおお・・・

声と思えないような声が男の口から聞こえた。

「さすが殺人鬼、頭が逝つてるとしか思えないねえ」

男が私を睨んだ、ターゲットは私らしい。

「！！」

一瞬の間に私の目の前に男が立っていた。  
人間とは思えない動きだった。

「ボヤッとすんな、距離を置け！」

いわれたおかげで動けた、転ぶようにして男の背後を取る。

「動かないでください！」

男の背中に切つ先を押し付ける。

「フイリアさん、危ないです！」「え？」

「さがれ！」

ガイインと金属の鈍い音がする。

私の体が弾け飛んでいることは分かった。

青年が弓を射るがそれらに臆することも無い。

「こいつっ！」

青年の弓に男が注意している間に女性が身の丈程ある戦斧せんばくを振りかぶった。

渾身の一振りなはずだった。

私も戦わないと、その思いに駆られ、剣を持ち直し突撃する。

「はあああ！！」

剣を真一文字に振りぬいた…はずだった。

「嘘・・・」

刀身を掴んでいた、手からは血すら流していない。

「早く弓を射れ！」

確実に当たるであろう胸を青年は狙っている。体が不意にひょいと浮き上がった。

「なつ！？」

「剣を放せ！」

そんな風に言われたように感じたけれど、何が起こっているのかに

思考が行ってしまって、剣を放さなかつた。

いつそう高く持ち上げられる。

男の顔がはっきりと見えた。

帽子の影で見えなかつた顔がよく見えて・・・・・

「あぐうう！？」

頭がパニックになつた。

重い衝撃が肩にかかつた。

何がどうしたのかわからない、何よりもまず疑問が浮かんだ。

## 懲りしそ (後書き)

基本的には主人公のフイリアには痛い目にあつていただこうと思つています。

と言つのも、攻撃され続けて、そのあとでギリギリで何とか根性で敵を倒すのが燃えるので（私はそんなの好きです）、もしもそのままでやられまくつたらと妄想も広がりますしね。ただし妄想を文章に出来るかは棚に上げさせてもらいますが。

次回、敵を倒すぞ！

## 人型の最期（前書き）

お久しぶりです。

応援のおかげで何とか這い上がつて来れました、約二ヶ月ぶりの投稿です。

久しぶりだと言うのにクオリティは相変わらずorraine物です。

それでも何とか頑張つて書きました、またよろしくお願ひします。

## 人型の最期

「・・・」

「起きたか・・・」

目の前には女性がいた、私を助けてくれた人だ。

「おい、セイル、あいつはどうしてる?」

あの弓を持つてる人はセイルという名前なんだ、なんてボヤつと霧のかかつた頭で思う。

「私たちを探します、一般人に被害は出なくなつたでしょうが・・・

・私たちが仲間と合流するのは無理かも」

「そいつは私たちを狙つてんだな?」

「ええ、でないとこんな茂みの中まで来ないでしょ?」

一呼吸をあげて、女性が言つ。

「私が姿を出す、あんたの言つことが正しいなら絶対私を逃さないだろ? その間にフィリアつれてここから離れろ」

それって、囮?

「絶対仲間を連れて來い! 死にたくはない!」

力強く言つてはいるけど…

「そんなの絶対ダメです! 僕は!」

負けんばかりの声をあげ、セイルさんは立ち上がつた。女性はセイルさんの口をふさぐ。

「この場がばれたりしたらどうするんだよ…」

茂みの奥の方を睨んでいる。

「あんたら、今すぐ逃げな」

「戦います、絶対離れません」

セイルは力強く言つ。

セイルさんがこの人に惚れている気がする、今この状況で思つことではないけど。

「悪いけど、歩けるかい、フィリア?」

「はい、腐つても近衛騎士です、戦えます」

「戦うつて……」

重いから、唯一着けてきていた鉄の胸当てを外す。  
肩が痛い、けどその程度。

いつも使っていた大剣も、使えそうにないから胸当ての上にそっと置く。

代わりに、腰から一本の短剣を引き抜いた。慈悲の剣、ミセリコルデ。

私たちがそう言い出したから、諦めたのか。

「危なくなつたら、逃げなよ?」

そう言つ。

逃げる気なんて無かつたりする、ついさつき助けてもらつた、私にとっては大きな恩。

安易で簡単なものではないかもしれないけど、この場でお手伝いできるならした方がいい……そう考えた。

それに、姫様にも怒られそうだった、死にそつだつたけどみんなが命からがら生還しましたなんて……

いや、でも、死ぬのは嫌かな……

失敗すれば、前とみたいに死しか見えなくなる。  
でもここまで考えてて、今更帰るつてのはダメ。

ついさつき何を考えたの?

自身に問いかける。

二人の恩と姫様のことが、答えとして帰ってきた。

最後の最後で萎縮してしまつたけど、それから自身を奮い立たせた。  
ほんの少しして、女性は茂みから抜け出る。

後に続く、利き手じゃない方で助かった、右肩だつたら、短剣と言

えど持てなかつたと思つ。

「さつきと同じ、斬つたら続けて」

「分かりました」

あの人間まで一直線に駆ける。

「だああ！！」

さつきと同じように斧が受け止められる。

続いて私が飛び掛る。

女性のわき腹を掠めながら、剣を突き出す。  
体が死角になつて、剣の動きが見えなかつたのだろうか、あつさ  
りとはらに突き刺さつて。

「当てる！」

「はい！」

セイルさんの引き絞る口は、頭を狙う。

躊躇い無く放つた矢はそのまま人の頭への軌跡を描いていた。

ぐぎやあああ・・・

「狙つてやつたか？満点だ！」

右目に矢が刺さつている、セイルさんは喜んでいるけど、私は少  
し痛々しく感じた。

何人と殺めていたとはいえ、人は人。

「殺すぞ！」

声をあげ、戦斧を水平に構える。首を刎ねる気だ。  
そんな所を見たくは無い、ほんの一瞬目を閉じた。  
と思ったら、振動がきた。

一瞬、首を刎ねた振動だと余波だとか考えていたが、そんなこと  
ではもちろんない。

くそつたれ、そんな言葉が聞こえたいがした。  
目を開けて。

さつき見た光景があつた、あの入間が戦斧を受け止めている光景。女性はすぐさま距離を取つた。

死に際なんて見たくない何て言つていられない。

一瞬距離を取ることも考えたが、押し切ると考えて、私は人に飛び掛けた。

右手で叩き落とそうと考えたのだろうか、手を振り上げる。

でもまったく反応が遅い。

首筋に剣を突き立てて。

「あれ……？」

左目は首に突き立てた剣をしっかりと見ていて、青い血液を噴き出しているのを見ている。

自身にも降りかかってきたほど、勢いがある。

「このまま押し切つて……！」

違和感を振りほどき、こゝそとばかりに声を上げた。

二人とも声を上げて反応してくれる。

2本目の矢が突き刺さるのを確認した、また頭だ。

そして、そのすぐ後に、戦斧が私の頭の上を通過して……

## 人型の最期（後書き）

久しぶりに書いたのですが・・・  
書き方が大分変わつてますね、何故か・・・  
元に戻した方がいいのかな？

とりあえずしばらくは続きを書くことを意識します、2ヶ月も待たせてしまつたので、とにかく続きをつて感じで書いていくかも。

次回、事後

## 気がつかない痛み

「すぐ疲れた、すぐ。

「すまないな、下手したら死んでいたかもしけなかつたのに」  
すぐ後ろから、あの女性の声が聞こえた。

「いえ、構いません生きて帰れますからね」

「しかし、何なのでしょうか？この人間・・・」

セイルさんが言う。

人間とは思えない力、薄い水色の肌、青い血液。

人間なの？

そんな疑問すら出てきた。

「そんなんのは後でいい、まずは町に帰るぞ、大騒ぎだらうからな」「はい、そうですね、かなり外れに来ましたし私がここを確保しておくんで」

「わかった、と言つわけでフィリア、帰るぞ、そんなんよく分からん液体だらけってのは気分悪いだろ？」

そういうば、頭の天辺をぽんぽんと叩く。

ベトベトしてた。

あの人間の血みたいなものを頭から浴び続けていたから、髪の毛なんか真っ青になつてゐる。

青い血なんて見たこと無いから、現実味がなくて、こんな異常状態でもわりと平氣だつた。普通に赤い血だったら、今ほどの血を浴びたら叫び上げてたと思う。

そのあたりは皆も同じらしい、女性の方なんかケタケタ笑つてる。

「手を貸すぞ」

視界の中に手が現れた。

「ありがとう」

手を取りながら振り返る。

「フィリアさん！早く目拭いて！」

セイルさんの方が布、ハンカチを取り出した。

手にそれを取るうとすると、女性の方がハンカチを叩き落とした。

「馬鹿！擦らせてどうする！？」

セイルさんを叱咤し、女性は私を背中に乗るよう促した。

「いいか？目を触るんじゃないぞ！」

私を乗せて駆け出す、疲れているはずなのにたぶん全力で走ってくれている。

当の本人である私には何があつたのかさっぱりわからなかつた。

「…」

姫様もエルもそこにいるはずなのに、何も言つてくれない。

「片目が見えなくなつただけだ、訓練を積めばまた動けるさ、実際目が見えず眼帯をしてなお戦士として活躍している人が私の知り合いのもいる、この城の兵士にも眼帯をついているのが2人いたのを知つていてるだろ」

「騎士団長…」

自室に戻つて、初めて声をかけてくださつたのは騎士団長だつた。

「一人も、あまりフイリアに冷たくするな、これはまさに名誉の負傷だ、何人の人間を殺害してきた怪人から人を救つたためにできた傷、躊躇い無く戦つたからこそ、この傷ですんだのかもしれない」騎士団長は続ける。

でも、姫様も、エルも本当に反応が無い。

「いえ、すごくうれしいですよ、この傷も団長の言つ名譽の負傷であることにぐりりい言われなくたつて分かります」

まるで腫れ物を扱うように、二人は態度を変えた。

優しくしてくれているとか、心配してくれているといふのとは違う

感じだつた。

お医者様は、肩の矢傷は治ると言つた、目の傷は治るけれど、目が見えるとは言わなかつた。

でも、治るかもしれない、治らなくてもまた訓練をして剣を振り姫様の前へ出れるように頑張るつもりだつた。

私が近衛騎士として頑張れば一人は親しくなつてくれるかもしれない、そういう希望を胸にしました。

## 気がつかない痛み（後書き）

何とか生きて帰ったフイリアですが今回は今までと比べられない、一生モノの怪我をして帰つてきました、二人はきっと、強いはずのフイリアがこうした相手に恐怖と殺意を覚えているかもしれません。

さて今回はいつも以上にぐるい要素を突っ込んで見ました（それでもちやちいと言う人が大半でしょうが）、さてファンタジーだと眼帯の男の人は歴戦の戦士である設定が多いですが、女性の場合はどうなんでしょうか、それ以前に女性の眼帯はあまり知らないしイメージも湧かない・・・

次回、療養中に訪問者。

## 大きな書庫と探し物

「フイリアさん、失礼します」  
扉を「ンコソ」と叩き人が二人、入ってきた。

「一人とも手に花を持つている。

「お姫様がいたのですか、これは失礼」

女性の方が頭を下げる、続いて男性の方も。  
「はじめまして、フイリアさんのお知り合いで？」

「はい、二人はあの時私を助けてくれた……」

「私はアイカ、こつちはセイルって名前で」

「僕たちはフイリアさんのお見舞いに来たのですが……また時を改め  
ます」

「私の方がお邪魔のようでフイリアさんがそうならば私が出て行きます」  
「みんないてくれても構いませんよ」と、なんだか返答に困ったので微妙に言葉になつていよいよ文  
を言つてしまつた。

「いやあ、ちょっとフイリアに話したい事だつたんだが……」「どうしたんですか」

「いや、動けるならちょっとこここの図書館みたいなどこに連れて行く予定なんだが」

「行けるのなら行かれた方がよろしいのでは？私達は構いません」  
姫様が言つ。

「コツと笑つて言つてくれたのが嬉しかつた。

「すみません」

そういうつて二人の後をついていった。

「あのですね、あの時の敵覚えてますよね」

忘れるわけが無い、あの時の強すぎた敵。

命からがら倒せたけど…

「あれから少し調べてみたんですけどね、古い書物に魔物の仲間みたいなことを書いていたんですがそれ以外のことがまったく分からなくてですね・・・」

「それ以上の事を探すためにここまで来た、一国の要の城の大図書館になら絶対あるはずだと田星をつけたまでは良かつたんだが、問題は城に入る術でね、悪いとは思つたんだがお見舞いを隠れ蓑にしたよ」

「いえ、そのためなら構いませんしお手伝いもさせさせてください」素直に言った、私の気持ちだ。

「それじゃ、長丁場になるかもしんねーが頼むよ」

「はい」

「まあしょうがないや、私たちも見た事ないし、田撃例も少ないつぽいしわ」

結果だけで言つと、何も無かつた。

彼女たちの言う魔物の類と言つ記述すら見る」とは無かつた。  
「出来ればまた来たい所だけど、またしばらく仕事があるから」「付き合つてくれてありがとう、時間が取れたらまた来るよ」  
そう言つて私たちは別れた。

## 大きな書庫と探し物（後書き）

今回も読んでくださりありがとうございました。

最初の頃みたいにどんどん話を進めたいと思いつつも、こういう断章的な短いお話も大切なんだなあといろいろなお話を読んでみたら思いました。

ただやつぱりかつこいい戦闘シーンとか、筆者すら赤面な恋愛シーンとかも書いてみたいなあとおもいつつ。

ただ、とにかくいろいろやるには少しずつでも話を固めて進めないといけないわけで。

しばらく数か月分のストックができるまで書き込みたいな・・・

## 久しぶりの剣

「エル、行きますよ」

「はい、先輩！」

訓練用の木剣を振りかぶる。

木で作られてはいるが、重さは本物と大差ない。  
大差ないから頭にでも当たるとどうしようもない。  
そのことは昔から言われていたけど。

今は本気でかかる。

足を動かす。

剣を目の前に抱えたまま。

「ハア！」

そのまま突き出す。

少し体をずらしエルは避ける。エルの剣が同時に突き出された。

突いた剣をエルのほうに横に振り、剣に振り回されるように自分は動き避けた。

エルの直剣は私の方に常に切つ先を向けている。

少し距離を取り、助走出来る間を作る。

剣を下げ携えるように持ち直す。

そして走る。

と、同時にエルも飛び出す。

逆手の持たれた軽量の剣はすでに突き出されていた。

速さに乗れていない状態で下げる剣を振り上げる。

利き手に少し痛みが走った、対して力が無いのに重い剣を無理して振り上げたからだろうか。

カンと木のぶつかる音がしてエルの手から直剣が飛び出す。

エルは別段驚いたりしていない、最初からこう思っていたのだろうか。

「目がなくても、やっぱり先輩は強いですよ

剣のなくなつた手を頭の上で組んでいった。

「いや、まだまだですよ」

そう、まだ。

さつきだつて腕がつた、療養中に少し力が落ちてしまったみたい。  
「目はちゃんと見えているんですね？」

「うん、片目でも何とかね」

目を包んでいるガーゼに手を当てた。

傷はなくて、綺麗に治つているとか姫様は言つてくれた、騎士団長  
は義眼を入れれば他からは目が傷ついているなんて分からぬだろ  
うとか眼帯を付けてみたらどうだといつていた。

なので、ガーゼなんてもういらないんだけど。

そんなことしても私が強くなるわけでもないし、私が弱いところを  
見せたかった。

このガーゼは私が弱いからついているんだと自分で思つて未だにつ  
けている、他の人には目が痒いとか言つてごまかしてはいるけど。  
せめて魔物くらいには戦えるぐらいに強くならないととてもこれを  
外す気にはなれない。

「すいません、聞いてしまつて…」

物思いに浸つている私を、怒らせたと勘違いさせてしまった。

「そんなことは無いよ」と、一言入れておいた。

「人相手なら、騎士団の中でもかなり上なはずなんだが」

騎士団長が外から私を見ていた。

自分でもそう思う、けつして思い上がりではない。

仲間同士での訓練ではともかく、本当の死ぬ氣で向かつてくる相手  
を手玉に取ることも出来たのに。

型の無い、あの時の犬のようななれない相手ならともかく、人の形  
であつたあの魔物にも負けたのが私には納得できない。

技量で負けていたわけではない、では単に力負け？

それなら言い訳もたつけど、私は力を捌くだけの技量はあつたはず  
なのだ。

今はただ、ひたすら自身を鍛えるしかない。

## 久しぶりの剣（後書き）

何とか更新しました、お久しぶりです。

今回は少し時間を経過させて、剣を振れる程度まで立ち直れたというところです。

主人公は実際のところ強いはずなのに私の登場させる敵が強すぎでむしろ弱く見えるといただきました。

フィリアの剣の腕ともども私の筆の早さも強くしたいと思つています。これからもよろしくです。

## 魔王にまだ思い

「おい、終わつたんだろう?」

「あ、はい」

慌てて、剣を下げる。

きつちりと痛みが来る、撃つたのかな。

「エルは少し片付ける、お前は医務室までついて来い」  
それだけ言い、私に手招きをする。

訓練場で貸される木剣をエルに渡し、私は騎士団長へついていった。  
大きな扉を抜け、上品な雰囲気の廊下を歩いていく。  
いつもの光景なはずなのに、気分が沈んでいるせいか、周りはいつも以上に華やかに見えている。

強くなる、そう思つたのに、やっぱりそれだけじゃ何をすればいいか、どこまですればいいか、それが見えない。

剣を振るつていれば筋肉は付く、走り回れば脚力は上がる。  
それらをやってどうなのか、仮に力をつけようと足を速くしようと、  
それだけでは私の理想の強さにはならないことは明白。  
魔物に負けない強さはどうすればいいか。

「団長・・・私には、経験が無いのでしょうか?」

「ああ、そうだな」

団長の言葉は案外重かつた。

経験なんてどうやってやればいい?

力はいつでもすぐにつけようとすることは出来る。  
でも、経験はおいそれと体感することは出来ない。

「言つておくが、姫をほおつて置くよつに魔物と戦わせる」となんて出来ないからな

少し間をおいて出てきた団長の言葉。

「ここ最近ずっと氣がつけば敵の、魔物の本を読み元氣があれば訓練だ、姫は基本エルに任せているんでろ」

「はい、でも私は強くなないと・・・魔物から姫様を守れませんし」

「お前の仕事は、確かに姫の剣である」とも含まれるが、それ以上に大切な役目が盾であることだらうが

団長の言葉はいつに無く冷たい。

「弱ければ守れません」

「そういう意味じゃない、盾になつて死ぬだけなら誰でもこなせる、極端に言うと子供だらうと老人だらうと、だがお前もエルも似た年齢で性別は女だ、お前以上に強いやつは城にいるのにわざわざ二人に剣と盾を任せているんだ」

ふう、と団長が息をついている。

私は下を向くことしか出来ない。

「いいか、姫はあと数年すれば国王らの決めた婿と結婚だらう、自由にできるのはそれまで、それまでの間、姫は今もこれからも重圧だけの世界に身をおくんだ、だが人間がそばにいれば重圧は減るかもしれない、それがお前のような歳の近い人間ならなおさらかもしれない」

「あと数年？」

「ああ、その数年の間がどれだけ長いか、俺にはわからん、だがその時間の間、お前には姫の支えになつて欲しいんだよ、誰も鬱な姫は見たくないんだ」

それはそうだらう、姫様は國の人気者で、この國に居る人たちのほとんどがそんなことを思うはず無い。

「ほら、しばらくは休暇だ、ゆっくり考えろ」

今と昔とで、姫様を守りたいと思つ氣持つけまつたく変わらないはずなのに。

どうしてこんなにも気持ちが晴れないのだろう。

何が変わったんだろう。

## 塞がこんだ思い（後書き）

主人公、実力もあるはずなのに、心まで弱くは無いのに、これまでの失態（と呼べるほどのものでもないのだが）に心を痛めている模様、これから主人公は脱却できるのか？

騎士で一番えらい騎士団長からの至極簡単な言葉の意味を考える事ができるのか。

と言つわけで次話は新章スタート　　予定　　たぶんね。  
正月中には出せるように頑張ろつ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3773p/>

---

騎士物語

2011年12月1日20時48分発行